

## まえがき

入江 杏

「世田谷事件」を覚えておられる方はどれほどいらっしゃるだろうか？　いまだ解決を見ていないこの事件で、私の二歳年下の妹、宮澤泰子みやざわやすことそのお連れ合いのみきおさん、姪めいのいなちゃんいなちゃんと甥おいの礼くんを含む妹一家四人を喪うしなった。事件解決を願わない日はない。あの事件は私たち家族の運命を変えた。

妹一家が逝はってしまったってから六年経たった二〇〇六年の年末。私は「悲しみ」について思いを馳はせる会を「ミシユカの森」と題して開催するようになった。「ミシユカ」とは、いなちゃんと礼くんがかわいがっていたくまのぬいぐるみの名前。さまざまな苦しみや悲しみに向き合い、共感し合える場をつくることで、「ミシユカの森」を、犯罪や事件と直接関係のない人たちにも、それぞれに意味のある催しにしたい。そしてその思いが、共感

と共生に満ちた社会につながっていけばと願ったからだ。それ以来、毎年、事件のあった一二月にゲストをお招きして、集いの場を設けている。

この活動を継続することができたのは、たくさんの方々との出逢いと支えのおかげだ。本書はこれまでに「ミシユカの森」にご登壇くださった方々の中から、六人の方の講演や寄稿を収録したものである。

第一章はノンフィクション作家の柳田邦男やなぎくに おさん。柳田さんをお迎えした「ミシユカの森」は、事件後、初めて世田谷の地で開催した集いだ。柳田さんからいただいた講演タイトル「悼む思い・つながるいのち」は、以来、「ミシユカの森」の通奏低音となった。被害者に寄り添う「二・五人称の視点」がキーワードだ。

第二章は批評家・随筆家の若松英輔わかまつ へいすけさん。若松さんとは、ヴィクトール・E・フランクルをテーマとした対談でお目にかかる機会を得た。事件後、一時、本が読めなくなった体験を話すと、若松さんは「自分の中で物語が書かれている時に人は、読めない。読むと書

くと同時にはできない。物語がその人の中で生まれている時は、本は読めないんですね」とおっしゃった。対談直後、その年の「ミシユカの森」へのご登壇をお願いした。

「光は、ときに悲しみを伴う『クリスマス・キャロル』を読む」と題するご講演とその後のトークセッションで、「悲しみは、愛かなしみとの出逢いである」と教えてくださった若松さん。事件以来、祝祭の季節を、祝祭として迎えられなくなっていた私が、この集いをきっかけに、「悲しんでもいい。悲しむことは愛すること、生きること」と、顔をあげて語り、クリスマスをもまた心から喜びあえるようになった気がしている。

第三章は小説家の星野智幸ともゆきさん。ご講演のタイトル「コトバの力と沈黙を強いるメカニズムに抗して」の背景には、神奈川県相模原市さがみはらの障害者施設で起きた大量殺傷事件があった。ほとんどの被害者の方のお名前が公にはならなかった。ご家族はお名前を公にすることを拒まざるをえなかった。

「世田谷事件の遺族です」。たったこれだけのことを言うのに、六年かかった。事件後六年間、母から「決して事件のことを口外してくるな」と禁じられ、沈黙を守っていた。

事件の第一発見者になってしまった母。母が何より恐れたのは、事件との関わりを世間  
に知られることだった。遺族となった私たちへの差別・偏見。遺された私たちの思つての、  
母の強い懸念を前にすると、私は沈黙せざるをえなかった。何よりただ一人、四人の亡骸  
を見た母の辛さを思うと、私は母の言いつけに背くことができなかった。

その母と私が精神的に訣別して、自分からの発信を決意したのは、母のある言葉がきつ  
かけだった。「礼くんは亡くなっても仕方がなかった……」。甥の礼は自閉。その障害を告  
げられた時、当初、受容できずに苦しんでいた妹。その苦労を思つての母の一言だったの  
かもしれない。当時としては、母の心配は当然のことと思う。甥の行く末に対して、母と  
一緒にあれこれ余計な心配をしていた私だったのに、母の言葉に突然怒りが降つて湧いた。  
自分でも驚くほど腹が立った。私の剣幕に母は驚いた。「実の娘にこの年になって、叱り  
飛ばされるなんて」。その直後こそ母は体調を崩したが、ほどなく日常を取り戻した。私  
は、日々の介護の合間を縫つて、母には気づかれないうよう発信を続けた。それは、「沈黙  
を強いるものへの抗い」だった。母は私の抗いには気づくことなく、私たち家族に看取ら  
れて静かに逝つた。母は私の鏡。私は自分の中の「ステイグマ（負の烙印）」に問いかける。

「何をばばかり、畏れて、自らの苦しみや悲しみをなかつたことにしなくてはならないのか?」と。

ホームレス支援団体との交流で知己を得た星野さんにこの年のテーマをお伝えしたところ、快諾くださった。このテーマこそ自分が文学と向き合う理由だから、と。

今でも誇られるのだが、「犯罪被害者の遺族なら、犯罪の被害だけに関心を持ってほしい」「なぜ、被災・罹病・自死など、ほかの悲しみに関心を持つのか?」と。「一緒にするな、違和感がある」とも言われた。確かに凶悪殺人事件の背景はさまざまで、それぞれがそれぞれに語るべきことはあるだろう。未解決事件だからこそすべきことも多々ある。ただ、「未解決凶悪事件の犯罪被害者遺族」という世間から与えられる単一のフレームを外してさまざまな問題に接することで、錨を下ろしたままになってしまふ悲しみから解き放たれた。

事件との関わりを公表することで、多くの出逢いと励ましがあつた。逆説的な言い方かもしれないが、「世田谷事件」が、いわゆる「大事件」だったからカミングアウトしたのだと思う。否、そうせざるをえなかつたのだ。マスコミにより暴かれてしまった、隠しよ

うもない悲しみ。メディアに取り上げられることもない事件だったら、封じ込めてしまったのではないか？ 母を看取った後、母への抗いよりも、愛いとしさが一層募った。母の気持ちもよくわかる。わざわざ悲しみを開陳することで、かえって傷ついたり、周囲から孤立したりするくらいなら、迷わず沈黙を選んだらう。事件、事故を問わず、日常にあふれる悲しみを語ることのできる安心安全な場は少ない。

上智大学グリーフケア研究所の非常勤講師を務めている数年前より、グリーフケアという言葉が人口に膾炙かいしやしていくのを間近に見てきた。グリーフとは喪失に伴う悲嘆のこと。悲嘆をもたらす喪失は、決して特別なものではなく日常のものだ。かけがえのない人やものの、関係、事柄を喪って悲しみにある人に、心を寄せることからグリーフケアは始まる。グリーフケアを通して、私は自分のグリーフだけでなく、さまざまな悲しみを知った。

悲しみの共通の水脈の広がり気づかされた瞬間、悲しみは生きる力に向かっていったように思う。自分の悲しみだけでなく、人が苦しむ姿に寄り添い、耳を傾ける。自分のことばかりに関心を抱くだけでなく、他者の悲しみに思いを馳せる。事件の解決には必ずしも

つながらないかもしれない。それでもグリーフケアの学びは、事件に遭遇する前からの、私の根源的な疑問に立ち戻らせてくれた。「何のために人は生きるのか？ 自分だけが幸せになるのではなくて、どうすれば世の中がよくなるのか？」

あえて特異性の高い事件の悲しみを語るばかりでなく、日常にあふれる悲しみを話すきっかけをつくれたなら。悲しみは日常のものだから。そう思い続けてきた。

悲しみから目をそむけようとする社会は、実は生きることが大切にしていない社会なのではないか。生きる上で悲しみを避けて通ることはできないからだ。悲しみから学ぶグリーフケア。「悲しみ」は「愛しみ」であることとの出逢い。誰かの悲しみに気づいてそつと手を差し伸べる。悲しみを忌避し、封印するのではなく、悲しみを受け止め、悲しみとともにどう生きるか？

第四章は臨床心理学者、東畑開人（とうはたかいと）さんのご講演を収録したものである。当時、グリーフケアとの関わりの中で、特に若い世代の方たちから「他者に語りづらい出来事から感じる自分のグリーフとどうつき合っていけばいいか」「他者のグリーフにどう寄り添えばいい

のか」という質問が続いた。共同体への帰属意識を実感できないことで、孤立化を招きやすい現代社会。つながり合う新たな場づくり、困りごとを気軽に話せるささやかな場づくりを求める声の高まりを感じた。その中で、「限りなく透明に近い居場所」アジュールと隠れ家」のテーマが生まれた。東畑さんの軽妙な語りを引き込まれつつ、「居場所」の意味を考える集いとなった。自発的参加によってつながり、対等に協働していく。出入り自由で、同時に複数に参加、所属ができるという「ミシユカの森」の都市型コミュニティとしての特徴もより明らかになったように思う。

第五章の小説家の平野啓一郎さんは、「ミシユカの森」に二回お越しいただいている。平野さんの提唱する「分人主義」におけるグリーンフケアは、愛する人を喪った時の喪失感を「その人とした時の『分人』を生きられなくなる悲しみ」と捉えた上で、故人以外の人たちの「分人」を少しずつ増やしていくことが回復につながる、という前向きな考え方だった。

事件以来、「時間が止まったまま」というメディアの常套句じょうとうくに辟易へきえきしていた私にとって、



この平野さんの「分人主義」という人間観は新鮮だった。犯罪被害者遺族として一つの役割に収斂しゅうれんされることなく、多様な関わりの中で外へ開かれていった。

平野さんは、同じ社会にいる人はみな「準当事者」であるという視点から、日本は犯罪被害者へのケアが不十分だとおっしゃった。

「よく考えてください。被害者のケアを怠っているのは、国だけじゃありません。『準当事者』である僕たちですよ。僕たちは、ニュースで見た犯罪被害者のために、一体、何をしているのでしょうか？」

平野さんのこの呼びかけだけでも、揺さぶられてしまう。「被害者」や「遺族」に対して、「ああはなりたくない」とみなに思わせるほどに、社会のケアは不在だ。

ケア不在の中、個人が悲しみに向き合うことを迫られるなら、悲しむ人は一層、声をあげられなくなるだろう。悲しむ人だけを囲い込んで、悲しみに向き合わせるのではなく、周りの人に悲しみに関心を持ってもらえたなら。

悲しみと向き合い、立ち直るための処方箋や対処法としてのみ受け取られがちだったグリーフケア。個人の悲しみを準当事者としてみなが支え合う社会があるからこそ、十分に悲しめるのだと思う。悲しんでいい。助けを求めてもいい。誰かが悲しんでいる時は、見えて見ぬふりをするのではなく、そっと手を差し伸べたい。

とはいえ、私自身、支えられる側から支える側に回ったなどと胸を張るつもりもない。喪失の当事者としての私が、そこから得たものを強調することは今もはばかられる。たとえば、喪失の悲しみを経て、かつての私よりましな人間になったとしても、愛する人たちと一緒にいることに如く<sup>し</sup>はない、といつも思う。もう二度と逢えない。もうあの人たちは帰らない——。だとしたら、その人たちに恥じないように、より善く生きたい、と願う。

第六章は上智大学グリーフケア研究所でもお世話になっている宗教学者の島<sup>しま</sup>蘭<sup>の</sup>進<sup>すすむ</sup>さん。本書の締めくくりとして、グリーフケアの基礎概念と歴史、悲嘆の文化の意義や今後の展開などを書き下ろしていただいた。

新型コロナウイルスのパンデミックにより世界中に悲しみがあふれる今、悲しみを通じ

てこそ得られる経験の次元を大切にする「グリーフケア」への注目が高まっている。グリーフケアには、悲しみのさなかにいる人、それを支えたい人はもちろん、すべての人が豊かに深く生きるヒントが詰まっているのではないか。喪失に向き合い、支え合う中で、「悲しみの物語」は「希望の物語」へと変容していった。悲しむことは愛すること。

本書が「かなしみ」と出逢う多くの人々の心を照らす希望の灯となることを願ってやまない。



### 入江杏（いりえ・あん）

「ミシユカの森」主宰。上智大学グリーフケア研究所非常勤講師。犯罪被害の悲しみ・苦しみと向き合い、葛藤の中で「生き直し」をした体験から、「悲しみを生きる力に」をテーマとして、行政・学校・企業などで講演・勉強会を開催。「ミシユカの森」の活動を核に、悲しみの発信から再生を模索する人たちのネットワークづくりに努める。著書に『悲しみを生きる力に——被害者遺族からあなたへ』（岩波書店）、絵本『ずっとつながってよ こぐまのミシユカのおはなし』（くもん出版）他多数。